



海人 うみひと

現場最前線

この船が 全てを教えてくれた

青木マリーン株式会社 第三拓洋丸 機関長
正岡 信哉 さん

まさおか・しんや

兵庫県宝塚市出身。地元の高校を卒業後、愛媛県にある国立海員学校に進学し、2年間で海員に必要な資格を取得した。青木マリーンの本社が当時大阪にあり、出身地と同じ関西圏という親近感もあって就職先に選んだ。

最初、埋立用の土砂を運ぶ土運船の機関場の見習いとして従事。神戸エリアの埋立地や神戸空港、関西国際空港Ⅱ期、中部国際空港と続いた海上空港の工事で、エンジンが円滑に稼働するよう、点検作業や修理などに日々奔走した。

30代早々に土運船の機関長となった正岡さんに転機が訪れたのは2010年。33歳だった。東日本大震災が発生する前年、八戸港を拠点とする1972年建造の大型ポンプ浚渫船「第三拓洋丸」のオーバーホールを行うため、青森県八戸市に数カ月間赴任することとなった。「東京より北に行ったことがなかった」こともあり、期待と不安が入り交じったが、3カ月ほどでオーバーホールも終わり次の赴任先の指示を待った。



ちょうどその頃、八戸港での仕事が増えていた。一級河川の馬淵川が上流から運んでくる土砂が堆積。大型船舶の航路を確保するために浚渫工事が定期的に発注されるようになっていた。

全装備出力8,360kWの能力を有する第三拓洋丸は業界でも有数の規模を誇る。正岡さんは、心臓部となる機関場に従事し、当時の機関長と共に働くようになった。以来、八戸での生活も15年に及ぶ。建造から今年で53年を迎える第三拓洋丸は、能力こそ健在ながら、老朽化が進む。メーカーに部品もない。不具合が生じた場合、代替部品を考えて自ら工夫して元の状態に戻るようしなければならぬ。機関場に従事する者の腕が試される。

年間を通じた数カ月間に及ぶ浚渫工事中は応援要員も含めて8人ほどが機関場に従事する。それ以外の期間は機関長と正岡さんの2人で次の作業に備えた船の調整作業に費やすことになる。そうした生活が続く中、5年ほど前に機関長が定年で退職となり、次の機関長に就任するよう会社から告げられた。予想はしていたが、いよいよその時期が到来した。そんな思いで受け入れた。同じ時期、少し上の先輩が船長に就任した。2010年の赴任以来、共に第三拓洋丸で仕事をしてきた気心知れた仲間だけに何でも言い合えるという安心感はあった。

機関長として浚渫工事中は「エンジンがちゃんと動くか常に心配している」という。何とか無事にその年の作業を終えたときには安堵あんどの気持ちでいっぱいとなる。エンジンに不具合が生じれば必死で復旧に専念するが、工事後は仲間との思い出話に花を咲かすエピソードになる。

新造船では味わうこともない苦勞が多い第三拓洋丸だが「この船が全てのことを教えてくれた」。そう笑顔で話す正岡さんは、次の工事に向けた船の調整作業に忙しい毎日を送っている。

【第三拓洋丸】

全装備出力 8,360kw、公称能力 910m³/hr、排水トン数 3,900t、船体主要寸法＝長さ 71m、幅 20m、深さ 4.5m、吃水 3m